

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	急性期病院と介護事業所との対話の場づくり～プライマリ・ヘルス・ケア活動としての「カフェ交流会」～
演者名	小林有菜、小松裕和、千野正之
所属	佐久総合病院 地域ケア科

【目的】

急性期病院との密な連携ができる地域包括ケアシステムは、その地域の住民や在宅医療・介護従事者に安心を与える。しかし、多くの地域において急性期病院はより急性期に特化する傾向はあるものの、在宅医療や介護に対する認識は低く、地域の住民や在宅医療・介護従事者の思いとは溝が深くなり、その思いをフィードバックできるような仕組みも乏しい。地域包括ケアシステムの構築には、急性期病院と介護事業者との対話の場の創設が求められている。

【実践内容】

我々は佐久市が実施している在宅医療連携拠点事業において、平成 25 年度より急性期病院と介護事業者との「カフェ交流会」を年 1 回開催している。佐久市内の 3 つの急性期病院、行政、各専門職種団体、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、老人保健施設、特別養護老人ホーム等、合計 60 の団体・事業所に参加を依頼した。平成 25 年度は「急性期病院における課題、介護事業所における課題」、平成 26 年度は「急性期病院における円滑な退院調整」についてワールドカフェ方式のグループワークを実施した。カフェ交流会終了後には、各年度内にグループワークで出された意見を集約し、急性期病院と介護事業所の代表者で今後の課題解決に向けて話し合いを行った。

【実践効果】

急性期病院にとっては普段顔を合わせない地域の介護事業所と意見交換を行うことにより、多くの気付きと顔の見える関係の構築が進んだ。地域の介護事業所にとっては、急性期病院のおかれている現状や役割に対する理解が進んだ。喧々諤々の議論も展開されたが、新しいつながりが生まれ、参加者のほとんどがこのような対話の場の継続を望んだ。

【考察】

急性期病院が地域に出ていき、介護事業所と顔を合わせ、連携の課題とその解決について対話する場を継続して創っていくことは、プライマリ・ヘルス・ケア活動として地域包括ケアシステムの構築に必要である。